



Title	『生活白書』の構想
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1952
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77323
Type	manuscript
Note	自筆草稿、200字詰め 49枚。のち、『総合開発』「北海道総合開発委員会事務局報」1952年、所収。
File Information	D026_01.pdf



[Instructions for use](#)

生活自書への構想

鈴木煥木方郎

(一)

人間生活の全領域を組織的に表現する事は

とん堅固な心と手とを有するはなない。特にこの全

領域を過不及なく同じ深みで観察しそれを通

織的に両取す。時に至難なり。あゝ。未だ此

人間活動の全領域を觀察する場合には凡そ

上記の項目について觀察したるよりい

七のてあよか

人同の日の生活は甚く多方面の生活互
 んて居るが、その事は人同が幾の多方面の各
 くに關心を持ち、居る事を意味する。生活の
 面が多ければ多い、又、少なければ少い、生
 活の面には、~~既~~ 即ち人は關心を持ち、居る。故に
 著し凡そ人の關心が、向ふところ、如何にあつたか
 を分断する。事があるれば、~~る~~ 生活する、側
 面の分断となり得る。その事、多くは、学問か
 人同の關心の分断を減らす事である。然るに、~~は~~ 小
 生活の側面の分断をなくし、格別、繁る事、~~は~~ けれ

としこの人同関心の分れは文化の分れと同様
 に一應分れしたとをいふは、支那の 現実の人同関
 心の程度には何れ従ひし立ち得る 木等
 凡そ文化も人同関心も時代と民族によつて
 異なるべしこのが多 何れの時代何れの民族にも
 適用される様な文化の分れや人同関心の分れ
 は、甚だしく自明の事柄である。是れは現実
 の社会的存在の科学的考察に依りて何れ従ひし
 ため。現実の存在の科学的考察に依りて種々の
 分れは甚だしく社会的である。

一國民のあり中の方面の生活を是く現はす
 時としこの^{書時}の口民の大多教^育にあつた農家の
 家程を若干記述せしむるの農家の一年間の歳
 入と支出を精密に調査せしむる方法をとり
 大考をなす。口民の大部分を占むる農家の
 一家の家計簿^{帳簿}をばく用へし是れは其の農家の
 人々の色々の方面^{生活}の生活の有様をばく分る、
 口民の大部分は大部分皆是れと同じ様子を呈
 示し、是れをばくせしむる。口民の大部分の生活内
 容と是れをばくせしむる。この推

一方法

断には二つの大なる気流が、
 人の生活の
 版には金銭には程々小なる
 方面に拍響にあり。
 し、又金銭の多寡が生活内容の多寡を反映し
 して、
 次は、
 口民の大多数が、
 農民にあり。
 口民金部を代表せし
 たり。と云ふこと、
 然し、
 此の二の方面は
 色々の有意なる暗部を
 含んで片と。
 北海道民の生活を其何れ
 の分野も過不及な
 く、
 鑑察し、
 再臨する事
 ば、
 生活の内比較

録を中心とし、二片を、今ではどくかたな
 史の編纂中業^に北民衆の生活が如何に推移し
 来たかとのため同じに焦^と果を置かうとし、片は
 〇 然し、二、二、七民衆の生活は充分に整理され
 二は片あり。地方史の記載には今では大仰の
 型が出来、片は、その水は結果に記し、ゆ
 し、民衆の生活の歴史と何なり、二片下つ。
 主とし、^て資料による制約も、とつくり、と
 何れも、然し、人同生活の全領域を如何に配
 するかに、つ、この現情が、名、り、二片、下、了、に、歸

根柢

な

島三子

因し之片の事は向終つた。

現在の

北海道民生生活白書は北海道民の生活全般の

経済的表現である。としとなれば、是れを

科学的嚴格に要する以上、

果ては、資料から考へて、内容も亦、

之、今こゝに、北海道民生生活白書の何れ一般

に期待する片の、初稿から考へた、

く、調査を考へて、必要か否か、

是れに期待する片の、トは北海道民の生活

全般の表現に、何、然し、こゝには北海道

道民の生活は、
 特殊な生活環境
 である。道民生活の特殊性及び道民生活
~~を~~ 説明するに、その生活の全般に及ぶ可
 事事は、命途の多岐に及ぶ。その生活の程
 り方、法、加、減、少、多、を、その生活の何れ
 の方面に、どの程度に、どの程度に、道民
 は、どのような特殊な自然環境の中、置か
 れ、その生活の幸福、不幸、を、その生活の
 中、どの程度に、どの程度に、道民の生活

三九

(二) 58

人口

北海道民生生活白書は北海道民の全體に關す
 るものなり。然し全道民の中に
 は明らかな生活の型も異なり、
 一政して片ずる標本標本の種別の人にも
 水と片ずる。この多様な標本の人口を
 如何に分類し、整理するべきか、
 甚不便なり。いんて區分が可成り
 又特に此場合最も有效な分類は何であら
 人々の一層基礎的な分類は地理的
 的、年齢、性別、職業、所得、
 教育、宗教、民族、その他

疎 十 九 家 族 社 會 的 條 件 上 二 半 以 上	半 色 の 社 會 的 條 件 上 二 半 以 上	生 息 河 水 東 小 川 水	ほ 油 石 炭 の 採 取 條 件 上 二 半 以 上	場 合 が 多 い 生 活 の 型 や 配 置 法 定 條 件 上 二 半 以 上	此 等 の 生 活 の 型 や 配 置 法 定 條 件 上 二 半 以 上	へ は 同 一 市 村 に お け る 同 一 年 齡 の 同 じ 性 の 者	小 市 村 等 の 配 置 法 定 條 件 上 二 半 以 上	の 生 活 の 型 や 生 活 水 準 の 配 置 法 定 條 件 上 二 半 以 上	此 の 生 活 の 型 や 生 活 水 準 の 配 置 法 定 條 件 上 二 半 以 上
---	---	--------------------------------------	--	---	---	--	--	--	---

一國聯を以つ
 部務部が
 二半以上

年治的 禁煙の ため 特に 近年は とうとう
 日加。 この 人に 純成に 対しては とうとう 死亡に 推
 不^多い 不^少い 不^か。 自殺 他殺 不慮の 災害 死
 他に 比して とうとう あり 不^か。 危険な 列しい 不^か
 治が 學問 水へ 入る。 とうとう いま 不^か。 平和 不安
 定した 先治の 習性 水へ 片や とうとう 不^か。 免心 尚
 最^大に とうとう 一の 結果 不^か。 とうとう 不^か。 片や
 結婚 離婚。 出生 何れも 先治の 結果 的 不^か
 とうとう 不^か。 とうとう 不^か。

人の 播成を 廣げに 用ゐる 不^か。 人の 動向を

(三)

8

村銀部

國民生活の内、経済的生産に關する活動を

大體的に眺め、其の良否に於て、~~職務~~職務を考

料す。按て場合には、~~人~~人々経済的活動を産業

と云ふ語で、~~素~~素市^{はすの加意あるか、}と云ふ。之の産業に從

して、~~片~~片は従業員の働かざるは是れは職業に

あらず。生計の資を得る為の職場である。國民

経済の円滑と隆昌を期す。為此に色んな計畫を考

料す。のは政治す。人の任務であるが、~~その~~その

地方計畫は~~是~~是り、又は是れ~~は~~は是れ~~を~~を創しん

即

機

やうともしたがけ水は又その
力もたけられ

御手紙

ついでとて、
機会も無い。
血分体も、
その

とは随分遠い
百ありある。
御手紙が
度、事は

そこで、
自分、
結核が少し、
も多々

なる事、
自分、
片、
又、
の家

族の生活、
少し、
豊か、
少し、
少し

結核、
結核、
結核、
結核、
結核

結核、
結核、
結核、
結核、
結核

結核、
結核、
結核、
結核、
結核

結核、
結核、
結核、
結核、
結核

結核、
結核、
結核、
結核、
結核

✳ 口良元々の職名が
を水へよびて。職名が
生活の基礎をかゝる。

口良元々の職名

①

甚

軽	東	片	と	た	よ	し	引	豊
政	的	の	は	く	の	一	を	美
が	な	の	は	知	の	部	を	美
か	な	の	は	る	の	部	を	美
き	な	の	は	り	の	部	を	美
と	な	の	は	と	の	部	を	美
一	な	の	は	し	の	部	を	美
つ	な	の	は	し	の	部	を	美
の	な	の	は	し	の	部	を	美
企	な	の	は	し	の	部	を	美
業	な	の	は	し	の	部	を	美
の	な	の	は	し	の	部	を	美
活	な	の	は	し	の	部	を	美
動	な	の	は	し	の	部	を	美
は	な	の	は	し	の	部	を	美
る	な	の	は	し	の	部	を	美

政治がきつてくる。一つの企業家の活動は

自らの
 専ら生産的所部について
 意図として行は

人の生活の全域に亘るべき事情を以て

丁度よい金回しと居る生活自書に於ては生産

活御の部分を余り深く取扱はれず、事は

右の現由の外に包んで居るべき事案に

関する事案に關する事は、經濟白書に於て

よく列ねられて決定的な事情を以ては

生活の本據は生産生活より寧ろ消費生活

の中にあると云つては云ふ邊りか、知れぬ

従来消費生活の部分を以て輕視し必要以上

に生活水準が低下して居るものには

を
さ

第11回 農村生活の検討に力を入れた必要あり

は水よのては生活の事と道徳の生活水準の上
昇政のめん級来れとめんやとめん心抱可し存

し〜
白の半果もい

同業道 以来道内産物の発展の爲に 肉脆之不精

私的指導を試みし水〜果ては、その産物に

従事人々の生活の指導を念に指導機関をす小

は消費生活の指導に力をはらひ、放任の形に

あつて、^{指導}住宅の回し出しして、一家の収入が、^{何と}増

す極むれば、住宅も自前も、^{何と}工夫し、改

善し〜
行くてあ〜りしとあめの水指導者の言い

分であつた。東北位にほとんどのあつた
 かと尋問の建築家披露道が今力てい盛
 実し^{（水）}て^{（地）}付^{（あ）}か^{（仲）}り^{（容）}具^{（至）}つ^{（て）}い^{（は）}な^{（い）}つ^{（た）}と^{（野）}放^{（し）}と
 を^{（他）}心^{（の）}一^{（同）}地^{（界）}宗^{（に）}銘^{（い）}て^{（工）}天^{（可）}と^{（野）}放^{（し）}と
 活^{（て）}き^{（よ）}。暖地^{（と）}移^{（り）}住^{（ん）}同^{（民）}
 の^{（中）}には^{（北）}海^{（道）}の^{（凡）}工^{（に）}住^{（居）}す^{（と）}。披^{（紙）}工^{（天）}
 拙^{（者）}の^{（あ）}つ^{（た）}あ^{（ら）}る^{（と）}。披^{（紙）}工^{（天）}
 生^{（産）}の^{（指）}導^{（に）}は^{（格）}収^{（め）}て^{（と）}活^{（動）}の^{（指）}導^{（に）}は^{（全）}
 ら^{（熱）}意^{（が）}あ^{（ら）}い^{（と）}よ^{（の）}あ^{（ら）}る^{（と）}。敗^{（戦）}す^{（と）}政^{（府）}
 の^{（方）}針^{（に）}あ^{（ら）}た^{（と）}。活^{（動）}す^{（と）}は^{（四）}界^{（要）}の^{（一）}と^{（あ）}

娯楽や教育の時を思ふ

計畫

個人生活改善は生活の基礎である職業生活
 活不安定であるは正に砂上の樓閣に於て事
 は勿論である。國民の生活安定の基礎は口内
 の産業を興し職場をかへる事である。正しく
 の通してある。個人生活の本質は生産生活即
 ち職業生活である。消費生活の中心に
 本質と主張する人々職業生活が個人生活の基
 礎又は不可欠の條件である事は勿論認めらる
 る相違ない。然し個人生活の基礎又は不可欠の
 條件が個人生活の本質と考へた場合に
 然し口内産業

中

好ましい
政治的措置

同振興に土地を方へ生産用資を世話し

事は最も限りにゆきを要する。土地の好ましい

特^{つて}に^{きつ}に^て振興^のに^はと^ん変^更を^要する^のに^は方^法

先づ振興の仕方についでのお勧めを

より、東に望みし、政治的措置を

同様に

171

(四) 位

比較的

生活水準をどの程度に引き上げれば容易である。

異国移住の生活水準を評価する事は強て不可

能である。それは日本画と西洋画を比較する

基準は無いかと同様である。日本画の最高の

ものは西洋画の最高のものと甲乙をつけがた

い。東洋の豊穡な生活と西洋の豊穡な生活と

比較して何れかより高い生活水準にあるかを

判断する事は困難である。判断何れかより高

い文化水準にあるかを見分けようとする事は困難

位

位

175

比較する。これは決して不可視ではある。

とばかりは云(た)ない。

徳い

の中に生活標準を指す事実は生活水準は更に
 低い人々多数あり、これに對し。然し生活標準
 は金々文銭的。その為ニ水を測定する事作意
 大國現の事。けれども生活水準も亦水
 水は富政的の事とし、測定する事作意。
 米に於て計りし米トトリリ民族の方位はたしか
 に有效な計りとは何れも文化の低く又累々
 毎に既去や片断の異、た測定基準を伴う事か
 必要とす。日本人に一般に適用する事し
 米トトリリの教養水準修むに生活水準測定基

準は未だ工夫さぬの片や、この私学も、
 立案した基準はその初め、この評可い、
 基準を用ふより、この在民族たるに
 此の生活の同様に、生活の基準を
 と、新基準を測定すべし、
 何人によつて、
 七この基準によつては、朝鮮人や甲口人との
 他、政略人等とは測定すべし、
 とは異つた文化の型を持つ人にて、
 来る。

(五)

27

北海道的な生活は他府物産の生活に比して

高くないか低いかな。安定して居るのかし居るのか

裁議ととりあつかう不審ととりあつかう

有物と取まか不審と取まか。總じて此等の同

等行政法了人の数に同心する所あり。道民

の生活は他に比して余り不審と取まか不

取まかたりは道民は乞の打元の方策を考へる

中要と取まか。北海道は今日他の府物に比し

丁史の地理的の島の特殊の立場にあり

180

こ	と	人		の	外	の	物	物	の
一	あ	は	北	平	は	安	を	た	の
二	る	少	海	定	は	定	常	合	故
三	。	く	道	と	有	心	心	計	に
四	。	は	を	登	い	と	来	北	北
五	。	有	花	屋	事	来	下	海	海
六	。	い	地	を	と	下	片	道	道
七	。	い	か	結	常	心	の	又	又
八	。	。	出	核	一	念	。	。	。
九	。	。	稼	地	心	念	。	。	。
十	。	。	の	。	念	孔	。	。	。
十一	。	。	。	。	可	す	。	。	。
十二	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十三	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十四	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十五	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十六	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十七	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十八	。	。	。	。	。	。	。	。	。
十九	。	。	。	。	。	。	。	。	。
二十	。	。	。	。	。	。	。	。	。

生活の地である。

の文化が成長したならば、
昔に破滅するものを感じた。
また、それは好む。

就、昔多岐の人にか急激に道成

を。全口、然るに我、人々、
定え、か、上、昇、し、て、つ、て、

最、り、精、厚、な、本、道、成、成、
流、入、し、し、果、た、の、は、あ、然、の、

ア、と、あ、り、
流、入、し、し、果、た、の、は、あ、然、の、

何、れ、敗、降、志、的、人、に、あ、り、
二、れ、等、の、敗、降、志、的、

人、に、導、入、し、よ、つ、て、在、来、の、道、民、の、習、行、を、或、り、
飛、

及、一、口、民、の、解、脱、は、我、ら、し、し、い、い、日、本、の、
創、建、の、為、に、

員、控

